

ブックレビュー



『カワセミ都市トーキョー ～「幻の鳥」はなぜ高級住宅街で暮らすのか』

柳瀬博一 著
平凡社 刊
定価 1,210円（本体 1,100円＋税）

「清流の鳥」「幻の鳥」と思われたカワセミが、東京の「小流域源流」にたくましく暮らしている。中心にある湧水とその流れがつくる「小流域源流」を擁した地形は、いつの世もその時代を勝ち抜いた人びとが希求する憧れの邸宅地になってきた。江戸・明治そして現代に続く東京の「高級住宅街」に近接する「小流域源流」はまた、環境の変化に適応したカワセミの生息地でもあった。

たとえば渋谷川流域の新宿、代々木、原宿、渋谷、代々木上原、富ヶ谷、青山、広尾、麻布、白金、六本木、高輪、三田など。そこには「カワセミが1年を通して暮らす巨大な小流域源流の緑地が複数ある」。

本書はA川などと「生態系保全の観点から、場所の特定を避けるため、観察地域はすべて記号標記」にしているが、その配慮が嬉しい。そして何よりも「カワセミ目線」に同

化してまめまめしく追跡する「古い野生」と「新しい野生」が共存する都内の豊かな生態系の物語が楽しい。心躍る第一級の「生物記」であり、新鮮な都市・まちづくり論になっている。

「カワセミ目線」で人間の都市・生活空間を見つめる。そのきっかけは、飼っていたセキセイインコとの家族公認の「恋人」同士のようない間柄から生まれたとか。インコとの「君」「お前」のような仲は、少年時代の筆者にもある。カラスやフクロウの子を育てた体験からだ。「鳥の眼・虫の眼・魚の目」で街を見直す視線を手に入れた著者の「観察日記」が少年のような輝きを放っているゆえんである。

これに著者の慧眼と筆力が加わり、ユニークで躍動的なレポートになった。ちなみに著者は1964年生まれ。慶大経済学部を卒業し、日経BP社の前身に入社。2018年から東工大リベラルアーツ研究教育院教授を務める。
(山海野 さんかいの げん 玄)